



SANZUI vol.10_2016 spring



特集
**Live
in
the
Nature**



SANZUI vol.10_2016 spring

CONTENTS

「SANZUI」は、実演芸術のあらゆる魅力を伝えます。
実演芸術に触れた感動が水の流れるように
人々の身体の中に深く浸透し、潤し、育みますように。
そんな思いを込めました。

<http://www.cpra.jp/sanzui/>

(バックナンバーの閲覧・プレゼントの応募はこちらから)

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作隣接権センター(芸団協CPRA)

02-11 特集 Live in the Nature

RISING SUN
ROCK FESTIVAL

巖島観月能

SCOT SUMMER SEASON

河口湖ステラシアター

12-13 美匠熟考

森下洋子のトウシューズ
ザ・ビーナッツのマスターテープ

14-15 カンゲキのスズメ「バレエ」

16-17 裏舞台という名の表舞台
「舞台監督」芳谷 研

18 実演家ゴヨータシ

19 ひとことください /
影山ヒロノブ

20 エッセイ
佐々木かをり

21 若き実演家の未来 / レオナ

22 SANZUI ぼっしょん
相馬子どもオーケストラ

24-29 ロングインタビュー

田中 泯

特集

Live in the Nature



Live in the Nature

特集:ライブ イン ザ ネイチャー

舞台は、自然の一部だ。

太陽の照明が時間ごとに光の色と角度を変え、
夜には月と星の演出が舞台を静かに包み込む。
邪魔するものは何ひとつない、大自然の中のステージ。
音楽は無限に響き渡り、演技は宇宙に溶け込み、
人々もまた、ありのままの自然な姿に還っていく。

RISING SUN ROCK FESTIVAL

Photo / Hitoshi Teranishi

ライジングに
来ないと
夏が来ない！

草の上に寝転んで、テントの中に座って。ご当地グルメを食べながら、ビールを飲みながら。もちろんステージのそばで踊ったっていい。みんな思い思いに音楽を、この空間を楽しんでいる。

大人数でバーベキューをしてい

たグループに何人で来たのか尋ねると、「11人……だったはずだけど、増えてる！」事前に約束していたわけではないという。会場に来れば会えるから、待ち合わせは要らないそうだ。

日本初の本格的オールナイト野

外フェスとして1999年に始まった「ライジング」。「毎年出演者の発表の前に予約しちゃう」という常連客も多いが、小さな子供たちの姿も目立つ。初めは恋人として来た二人が夫婦となり、やがて子供を連れて訪れる。ライジングは、

たくさん家族を見守ってきた。「この日休みを取れないなら辞めますって職場に宣言してる」という人も。お盆を過ぎると一気に涼しくなる北海道。このフェスは、短い夏の最後を飾る、年に一度のお祭りなのだ。



RISING SUN ROCK FESTIVAL

北海道・石狩湾新港で2日半にわたって開催される野外フェス。会場内にテントを張って宿泊でき、2日目は名前の通り日が昇るまでライブが行われる。普段は何もない平原なので、準備は広大な土地の草を刈るところから始まるとか。レストランエリアや薪割り体験など、音楽以外の楽しみもいろいろ。2016年は8月12日（金）～13日（土）に開催予定（ライブは14日朝5時頃終了）。夜は冷えるので、日除けや雨具に加え、寒さ対策を忘れずに。



ITSUKUSHIMA KANGETSUNOH

Photo / Kenichi Hanada



「葵上」喜多流 シテ 友枝昭世

自然のなかで 躍動する 能のエネルギー

10月某日、厳島観月能が始まる数時間前の浜辺。夕陽を浴びながら、4人家族が静かに海を眺めていた。東京から来たという。「この公演だけは寝たことがないって友人が言うから」とお母さんが笑う。一度はお能を観てみたいと思っていた。

やがて辺りが暗闇に包まれ、能の始まりとともに、潮が海に浮かぶ能舞台を包んでいく。ちゃぶちゃぶ。不規則な波の揺らめきに、般若の目が光る。鋭い囃子、力強い掛け声が、空に抜けていく。見上げれば冴えわたる月。静かに

激しく能が満ちていく。「自然の中だと、演者のエネルギーが大きく広がっていく感じがすごい！」終演後、名古屋からの女性は、ここなら何度でも来たいと、興奮気味に語ってくれた。もともと能は何百年も野外で上

演されてきた。光、風、雨、雲、山の色、虫の音。いつも絶え間なく変化する演出があり、各時代の役者は、その中で能をいかに魅せるか腐心してきたはずだ。旅先で自然を感じながら、能に出会う。そんな時間もいいかもしれない。



厳島観月能

言わずと知れた世界遺産・厳島神社には、日本で唯一海中に建てられている能舞台があり、厳島観月能は、毎年10月頃開催されている。4月には桃花祭御神能で能・狂言の奉納も。こうした野外能や薪能は春から秋にかけて全国で開催されているので、お住まいの地域で、旅先で、ぜひ探してみてください。(SANZUIのHP参照)
<http://www.cpra.jp/sanzui/>

SCOT SUMMER SEASON

Photo / Toshiharu Murosawa

山奥で 世界の演劇に であう

舞台の向こうには湖水が広がり、照明を浴びた山の木々が浮かびあがる。劇団SCOTの代表作『世界の果てからこんにちは』では、ロケット花火が湖を横切り、あちこちから火花が噴き出す。老人の妄想の中の戦争の情景だ。頭上に

広がる打ち上げ花火の迫りに歓声があがる。「花火芝居」とも呼ばれるこの作品は、野外劇場のここ

でしか見られない。「一度観てみたい」と県内からバスで来た母娘や、「花火が上がって好きだから」という村民、リピー

ターの学生や複数の大学ゼミ。会場となる利賀芸術公園は、富山空港から車で約1時間。冬は雪に閉ざされる山奥だが、キャンプ場もあり、期間中はグルメ館がオープンする。自然とのふれあひも兼ねて、大勢の人がやってくる。

2015年のSCOTサマー・シーズンには25か国から約300名の演劇人が集まり、アジア各国の作品が上演された。昼はイワナやお蕎麦を楽しみ、夜は観劇。終演後の高揚感と解放感を味わえば、初めて会った人もみんな仲間だ。



劇団SCOT (Suzuki Company of Toga)

1966年、鈴木忠志を中心に早稲田小劇場として創立。1976年に拠点利賀へ。合掌造りの民家を改造した劇場で活動を始め、後に富山県や南砺市と協力して6つの劇場、稽古場、宿舎などを増設。一帯を富山県利賀芸術公園として整備した。日本初の世界演劇祭の開催、海外の演劇人との共同制作など多国籍な活動を展開している。今年は創立50年、拠点を利賀に移して40年の節目の年。北陸新幹線も開通し、ますます見逃せない。



Mt. FUJI KAWAGUCHIKO MUSIC FESTIVAL

Photo / Ko Hosokawa



リズムにのって 開放的な 夏のひととき

東京から2時間、富士山を目の前にレジャーでも人気の河口湖。緑の眩しい湖畔に立つ河口湖ステラシアターの音楽祭を訪ねた。外には屋台が並び、蔵出しワインも味わえる。生演奏が盛り上がる中、初めて来たというカップルから

「外でワインと音楽を楽しめて気持ちいい」と笑顔が返ってきた。屋根の開いたホールには、風がそよぎ、蝉の声も聞こえてくる。客席は、中高生、家族連れ、老夫婦、クラシックや佐渡裕さんファンのツアー客などで賑わう。吹奏楽部

の友達が出るので初めて来たという高校生は、プロの演奏に「迫力があって楽しい！」と興奮した表情だ。赤ちゃんを抱いたお父さんは、「里帰りの楽しみ。ボランティアの人のあたたかい感じがいいし、子どもと入れるのは嬉しい」

と満足気。一際はしゃいでいたのは、知的障害をもつお子さん。お母さんも「前回とてもよかったので、こういう機会に楽しんでいます」と嬉しそう。誰もが音楽にのって、自然体で参加できるのも、開放的なホールならではの。



河口湖ステラシアター

半円形の野外劇場として1995年に誕生。2007年には可動式の屋根が完成し、全天候での公演が可能となった。2002年から、指揮者の佐渡裕氏を音楽監督に、町民ボランティア、町内の中学・高校の吹奏楽部顧問、高校生らを実行委員とし、毎年8月に音楽祭を開催。地域が一体となって取り組む音楽祭の実行委員会は、2012年に地域再生大賞特別賞を受賞。2015年には、初のバレエフェスティバルも開催された。

うらわまこと (舞踊評論家)
Urawa Makoto

森下洋子の トゥシューズ

トゥシューズが考案されたのは、今から約200年前のフランス。これによってバレリーナたちは、重力から解放され、さらに高みを目指すことができるようになった。その後、さまざまな工夫が重ねられ、バレリーナにとっては、単なる用具でなく、身体の一部ともいえる存在になっている。もちろん、これをわがものとするには、足の爪を割り、まめをつぶすという、文字通り血のにじむ努力が求められる。

わが国が世界に誇るバレリーナ、森下洋子。彼女とトゥシューズの付き合いは60年を超える。彼女ほどこの意味を知り尽くしているものはいない。たとえば、『白鳥の湖』の情緒に満ちたオデットと妖艶なオディールを踊り分ける時も、ロミオにたいするジュリエットの思いを演じ上げる時も、それはつねに彼女とともにあり、彼女の意のままに観客に感動を与え続けている。



協力:公益財団法人松山バレエ団

Number:019

Toe Shoes

矢内康公

(株式会社キング関口台スタジオ録音部・
マスタリングエンジニア)

Yanai Yasuhiro

ザ・ピーナッツの マスターテープ

CDよりも格段に良い音質で聴くことができる「ハイレゾ」。この1967(昭和42)年に録音されたマスターテープから、ハイレゾ音源を制作しました。ザ・ピーナッツの録音に携わったエンジニアにも話を伺い、当時の録音環境を考えて、今の技術なら、どのように録音できるのかを想像しつつ、マスターテープの音を聴きながら、機材を調整して音を補正し、元の状態に近づけていきます。当時は、一発録りが多く、歌い、演奏する方も、録音する方も、緊張感のある中で録音していたと思います。

ハイレゾ化には、アーティストたちの歌や演奏を、より良い音で後世に残すという意味もあります。アーティストの歌や演奏を残す唯一のマスターテープ。録音された音が、今でも再生できるのは、先輩方が、しっかりと保存、管理していたお蔭ですね。



協力:キングレコード株式会社、株式会社キング関口台スタジオ

Number:020

Master Tape

夏はバレエの季節です！夏休みはいろんな作品の見せ場を集めて上演するフェスティバルや小さなお子さんも一緒に観られる公演が多いほか、海外のバレエ団はシーズンオフにあたり、本国での公演がないダンサーが日本の作品に出演することも。なんと今年は英国ロイヤル・バレエ団とミラノ・スカラ座バレエ団が3年ぶりに来日。日本にいながら世界最高峰のバレエを見るチャンス！ちょっと値段は張りますが、プチ旅行気分を出かけてみては？



軽やかさはつま先から

バレリーナがつま先一点で立つことを「ポアント」といいます。まるで上から吊られているかのようですが、200年ほど前には、実際にロープを使ってダンサーを飛んでいるように見える仕掛けが流行したこともありました。その踏み切りの際、一時的につま先立ちになったのがポアントの原型という説も。その後、シューズの改良や技術の向上によって、現在のポアントが完成。妖精や白鳥など、幻想的な世界を表現するのに欠かせないものになっています。体重の数倍の力がかかっていることを感じさせない軽やかな演技は、トレーニングの賜物です。

世界に誇る！ コールド・バレエ

バレエは西洋生まれですが、日本のバレエ団が世界に引けを取らないと言われているのが大勢で踊るコールド・バレエ (corps de ballet)。一糸乱れぬ動きに定評があります。全員で同じポーズを取ったり、ウェーブのような動きをしたり、指や足の先までぴったり揃った演技は圧巻。メインのダンサーが踊っている後ろで背景のような役割をすることも多いのですが、非日常の世界をつくり出す大切な要素。こちらにもご注目です。

手で口ほどにものを言う

台詞のないバレエでは、登場人物の会話は、「マイム」と呼ばれるしぐさを組み合わせて表現します。例えば、両手を上げて糸を巻くようにぐるぐる回すしぐさは「踊る」。回したあとに両腕

を下ろして広げれば「踊りましょう」と誘う表現に。右手の人差し指と中指を揃えて空を指せば「誓う」。白鳥の湖、ジゼルなど定番の演目でよく登場するマイムです。愛を誓う場面で見られるので、ダンサーの表情もお見逃しなく。



昔はご法度、今は常識

バレエというと、タイト姿で踊る男性ダンサーを思い浮かべる方も多いかもしれませんが。しかし20世紀はじめまでは、タイトの上上半ズボンが普通で、タイトのみで舞台上がるとスキャンダルになったほど。しかし、時代とともに男性の振付がよりダイナミックになると、ズボンは踊りの妨げに。そこで、踊りやすく、そして鍛え抜かれたお尻から脚の美しい筋肉を存分に見せられる今のようなタイト姿で踊るようになったのです。



公演情報 (海=海外のバレエ団の公演)

★公演日程は公演開始日～終了日。会場によって公演日程が異なります。

演目	会場	公演日程
NBAバレエ団公演『死と乙女』	北とびあ	5/27、29
法村友井バレエ団『ドン・キホーテ』	あましんアルカイックホール	6/5
牧阿佐美バレエ団 60周年記念公演シリーズVI『ノートルダム・ド・パリ』(全幕)	文京シビックホール	6/11、12
新国立劇場バレエ団『アラジン』	新国立劇場	6/11～6/19*
英国ロイヤル・バレエ団来日公演『ロミオとジュリエット』、『ジゼル』	東京文化会館、福岡サンパレス、兵庫県立芸術文化センター、愛知県芸術劇場、ふくやま芸術文化ホール	6/16～7/6*
東京シティ・バレエ団『白鳥の湖』	ティアラこうとう大ホール	7/9、10
バレエの王子さま	文京シビックホール	7/15～18
平成28年度 新国立劇場バレエ団 こどものためのバレエ劇場『白鳥の湖』	新国立劇場	7/21～24
東京バレエ団 子どものためのバレエ『ドン・キホーテの夢』	よこすか芸術劇場、越谷コミュニティセンター、オーバード・ホール、びわ湖ホール、春日井市民会館、三重県文化会館、アクトシティ浜松、アクロス福岡、兵庫県立芸術文化センター、川口リリア、イズミティ21、長野市芸術館	7/23～8/11*
キエフ・バレエ 華麗なるクラシックバレエ・ハイライト	足利市民会館、パストラルカゴ、北陸電力会館、ロームシアター京都、東海市芸術劇場、NHK大阪ホール、いたみホール、菊川文化会館アエル、御殿場市民会館、和歌山県民文化会館	7/23～8/11*
オールスター・バレエ・ガラ	東京文化会館、フェスティバルホール	7/23～30*
親子で楽しむ夏休みバレエまつり～キエフ・バレエ～	東京文化会館、オリンパスホール八王子	8/2、3、7
めぐろバレエ祭り	めぐろパーシモンホール	8/17～21
ファミリーフェスティバル2016 バレエ『くるみ割り人形』	日生劇場	8/26～28
ミラノ・スカラ座バレエ団 2016年日本公演『ドン・キホーテ』	東京文化会館	9/22～25

Illustration / Takao Nakagawa 協力：一般社団法人日本バレエ団連盟
参考文献：Clara・編「バレエ名作物語1・2」(新書館、2000)、長野由紀「バレエの見方」(新書館、2012)、
守山実花「バレエに連れてって!」(青弓社、1998)、渡辺真弓「バレエの鑑賞入門」(世界文化社、2006)

裏舞台 という名の 表舞台

多くの人たちによってつくられる舞台。
主役のまわりに視線を転じてみると、
至る所にプロの技が輝いている。
舞台を支える人に光を当てる。

STAGE 13

舞台監督

Stage Manager

芳谷 研

Yoshitani Ken



Photo / Ko Hosokawa Text / Rie Shintani

「監督」とはチームをまとめ、指導し、引っぱって行く人のこと。ではそこに「舞台」が付くとどんな仕事になるのだろうか。劇団☆新感線や蜷川幸雄氏のもとで舞台監督（通称：舞監／ブカン）として活躍する芳谷研さんは、その仕事を「コミュニケーション」だと言う。

「演出家がやりたいことを具現化する、美術・照明・音響・衣裳……各プランナーとのやりとり、要は調整係、雑用係ですね(笑)。彼らのやりたいことを聞き、それができかねないか、どうすればできるのかを検証してまとめていくのが僕の仕事です」

芳谷さんが舞監の仕事を知ったのは18歳の頃。当時は飲食店でアルバイトをしながら小劇団で役者を目指していた。

「小さな劇団だったので何でも自分たちでやらなければならない。役者以外にもこんな仕事があるのかと、そこで舞監という仕事を知りました。もともと役者志望でし

たが、劇団が2年で解散。その時の舞監さんに、仕事がないなら手伝うかと誘ってもらったのが始まりです」

その会社で演出部（舞台監督のもとで動くチーム）のひとりとして働き、24歳の時に元宝塚歌劇団の謝珠栄さんの踊りの発表会の舞監を任された。その後は主に外国人演出家の舞台を担当。経験を積んでいく。興味深いのは舞台監督の仕事は、こういうものだルールがないことだ。

「僕には2人の師匠がいますが、こうしなくてはならないという決まりはなく、仕事の中身もルールも人それぞれです。僕の場合は各部とのやりとりの他に役者のサポートもします。たとえば、外国人演出家が通訳をとおして各部に指示を出しているとき、いま〇〇をしています、とマイクでアナウンスするのも僕の仕事です」

観察力と気づき、そして気遣いが必要不可欠な仕事だ。ひとつの舞台に関わるすべ

ての人を繋ぐのが舞監であり「この仕事はコミュニケーション」という表現は確かに的を射ている。

芳谷さんの大きな転機は1996年。赤坂BLITZで行われたプロデュース公演『D-LIVE～ロック・トゥ・ザ・フューチャー』で、いのうえひでのり氏と出会ったことだ。「当時はまだ会社員としてでしたが、それがきっかけで1999年の『直撃！ドラゴンロック2～轟天大逆転』の舞監として声がかかり、その後のいのうえさんの作品はほぼやらせてもらっています。新感線の舞台は大きな劇場ばかり。舞監として経験の浅い30代の頃は、若いという理由でなめられたくなくて必死でしたね」

思い出深いのは、いのうえさんと知り合った翌年に任された『阿修羅城の瞳』だと言う。31歳の舞台監督にとって歴史ある新橋演舞場は「キツかったですね(苦笑)」とふり返る。

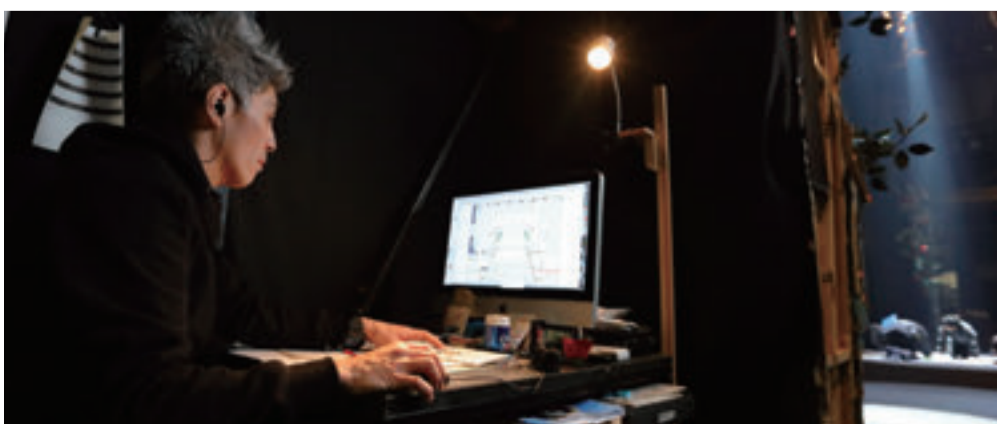
「大きな劇場になると劇場専属の大道具さんもいるので、スタッフとキャストすべて含めると100人以上。まとめていくのは大変ですし、気を遣います。初めて演舞場で仕事をしたときに大道具の頭領さんに、あんまり仕事をし過ぎるなよ、体壊すぞって言われたそのひと言がすごく嬉しくて。短い会話であっても会話があることでコミュニケーションが生まれる。その時、自分も彼のような先輩になりたい、自分が嬉しい

と思ったことは実行しようと思いました」

それから16年。今年にはBunkamuraシアターコクーンで開幕公演、蜷川幸雄演出『元禄港歌-千年の恋の森-』に始まり、夏には劇団☆新感線『Vamp Bamboo Burn～ヴァン・パン・バーン～』が控える。そんななか、新たな夢も抱いていると言う。

「本来の僕は一人っ子で暗い性格で、喧嘩っ早くて頑固。なので20代後半の頃、自分は舞台監督という仕事に向いていないのではないかと迷ったことも。次の仕事(舞台)で辞めよう……と最後のつもりで必死で頑張ったら、逆に楽しくなってしまって今に至ります(苦笑)。それからは辞めたいと思ったことはないですね。野望もないですけど。ただ、30年近く舞台の仕事をしてきて、嬉しいことに、東京の大きな劇場のほとんどで仕事をさせてもらった。その経験は財産です。経験があるからこそ“こんな劇場があったらいいな”と考えることもある。いつか劇場をひとつ作ってみたい、という夢はありますね」

PROFILE 芳谷 研(よしたに・けん)
1968年生まれ。1992年に舞台監督デビュー。1996年に演出家のいのうえひでのり氏と出会い、1999年に劇団☆新感線『直撃！ドラゴンロック2～轟天大逆転』の舞台監督を任される。その後、17年にわたり多くの劇団☆新感線の作品で舞台監督として活躍。2005年には蜷川幸雄演出『KITCHEN』の舞台監督に抜擢され、『オレスティス』(06)、『カリギュラ』(07)、『ファウストの悲劇』(10)、『下谷万年町物語』(12)、『皆既食』(14)、『元禄港歌-千年の恋の森-』(16)などの蜷川作品を担当。2016年は劇団☆新感線、いのうえ歌舞伎《黒》BLACK『乱鶯』、夏にはSHINKANSEN☆R『Vamp Bamboo Burn～ヴァン・パン・バーン～』が控えている。



協力：Bunkamura シアターコクーン



大阪鮮魚
八竹

東京都新宿区四谷3-11
電話: 03-3351-8989



★茶中ずし大阪鮮魚・穴子入りの巻見たりが、あざやかな伊土屋に集まれること絶対まちがいなし！
詰合せ 1人前: 1,420円



★食料品店時代の看板。雀とは鯛のこと。



★ハヤシのロゴマークは、さやえんどうとキノコのモチーフ。

緑ののれんが目印！
夏には麻に衣替え。

四谷三丁目駅すぐにある、大阪鮮魚専門店の「ハヤシ」。大阪鮮魚とは押し寿司と呼ばれるもの。お店でも食べられるが、寺町というところもあり、お彼岸の時期には、持ち帰りのお客さんが賑わう。

演劇関係者にも、差し入れて好評のようだ。

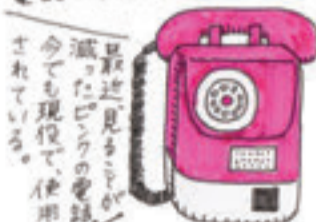
折りのサイズ・寿司の組み合わせは、自由自在。特に注文が多い茶中ずしには穴子とれんこんが入っている。昔と変わらぬ素材にこだわりの職人さんの丁寧な作りで、どれも味わい深い。



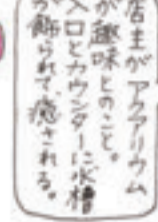
東京都世田谷区北沢2-9-24
オロ田ビル1F
電話: 03-3446-6148



2階は座敷になっている。20〜30名でも対応できるほどの畳でくつろげて、お酒もすすみます。



★最近見ることが減ったビュウの電話。今でも現役で使用されている。



★店主がアクアリウムが趣味とのこと。入口とカウンターに水槽が飾られて、癒される。



★お店の手作りポテトサラダ。牛乳がたっぷり入っていて、家庭的でおいしい。



★お店の手作りポテトサラダ。牛乳がたっぷり入っていて、家庭的でおいしい。



★骨付きで、とってもジューシー。ちよびめのロゼイがやみつきになる。

本多劇場近くにある居酒屋「ふるやと」。劇場近くとあって、公演期間中、役者さんにも利用されているそう。公演期間中は、毎日利用する劇団もあるという。近頃、大勢で利用できる座敷のある店も減っていることもあり、重宝されている。2階の座敷は、演劇関係者の子約がよく入るそう。

味もまちがいない！ロゼイ、築地などで旬のモノを仕入れ、家庭的な味付けで提供されている。お店のおススメは、初夏はもうこしのかきあげ。冬はカキだそう。

元来飽きっぽい人間なんですが、唯一、10代からやり続けているのが音楽です。でもこの世界は好きというだけでは生き残れない。LAZY解散後、ソロになってからの数年間は実力を磨く期間になりました。自分は『ウサギと亀』という亀タイプ。コツコツやり続けて人生全部をかけて、最終的に帳尻を合わせるしかない。当時、時間だけはあったので、年間120本、ライブハウスを回りました。ライブが続くと声が出なくなる時期があるんですが、それでも歌い続けていたら、声が強くなり、自分の思う艶を出せるようになった。レベルアップした時期に、日本コロムビアのディレクターから声をかけてもらい、アニソン界でのキャリアが始まった。すべての経験が血肉になってますね。JAM Projectでは自分をメインストリートに引っ張ってくれたアニソン界への恩返しの思いも込めて活動しています。

来年デビュー40年ということで新作を制作中で、1曲英詞にも初挑戦しました。海外公演が増えてきたこともあって、47歳で英会話を勉強し始めました。英詞に挑んだのはその下地があったから。「継続力」の大切さを今も実感しています。

継続力
影山ヒロノブ

ひとこと
ください
第四回
影山ヒロノブ
Photo / Ko Hosokawa



PROFILE 1977年、「LAZY (レイジー)」のボーカルとしてデビュー。解散後1985年「電撃戦隊チェンジマン」主題歌でアニメ・特撮ソングデビューし「ドラゴンボールZ」主題歌「CHA-LA HEAD-CHA-LA」や、その他後世に残る名番組の主題歌を担当した。また「アニソン界」を代表する実力シンガーによって結成されたスーパーユニットJAM Projectのリーダーとして活動し、国内のみならず世界でも活躍。



エッセイ

佐々木かをり 「ライブが生活をジューシーにする」

Illustration / Asuka Kitahara

4年前、知人の路上ライブで初めてゴスペルの世界にふれて、とても感動しました。実は、自分ではカラオケも行ったこともないぐらいでしたが、1年後にはゴスペルクワイア（聖歌隊）をつくりました。病に倒れた母の介護も一段落し、私にも精神安定が必要だと思ったタイミングでした。月に4回、2時間のレッスンで、本番に向けて練習します。メンバーは会社役員や弁護士、作家、俳優など二十数人。いつもはリーダーの立場にある人たちが、先生の指導を受けながら歌や振りも覚えて。ハモった感じや一緒に舞台をつくる達成感というか喜びは、とても開放的です。仕事で10分の隙間もない、大きなストレスの毎日なのに、やっぱりレッスンに来てよかった、と皆帰っていく。

歌うことやコンサートを楽しむことは、ビジネス界でも、いい意味で人懐っこい、人が集まって来る力を育てるようです。音楽がある空間を一緒にエンジョイできる自分であること。「この人と一緒に仕事をしたい」とか、「もっと一緒にいたい」、「また会いたい」と思わせるような“色

気 (seductive / 魅了する)”も、ライブを楽しむ時間を持つことで醸成されるのではないのでしょうか。色気のある人じゃないと仕事もうまくいかない。それだけの色気があるから、みんながその人のファンになります。

私は、音楽が好きすぎるぐらい好きです。中学のときからずっとチューリップや財津和夫さんのライブに行ったり、最近ではポールマッカートニーさんの東京公演全席。ミュージカルもよく見に行きます。ライブの空間が好きなんです。ライブなものにふれると、生活が豊かになる。そういう時間をもつことで生活がジューシー (juicy) になります。音楽や演劇など、心を揺さぶるものは、人としての幅を広げる。心が柔らかい方が何でもうまくいくでしょう。

上智大学外国語学部卒業後、フリーランスの通訳を経て、通訳/翻訳をてがける(株)ユニカルインターナショナルを設立。2000年に(株)イー・ウーマンを設立、同年サイト「イー・ウーマン」を開発。96年より毎夏「国際女性ビジネス会議」開催。内閣府「規制改革会議」、経済産業省「産業構造審議会」など政府委員他、上場企業の社外役員や国立科学博物館経営委員等も務める。著書には、『なぜ、時間管理のプロは健康なのか?』『佐々木かをりの手帳術』、他。2児の母。ewoman.jp

若き実演家の未来



Photo / Kota Sugawara

進化する身体から 生まれる音

レオナ (タップダンサー)
Reona

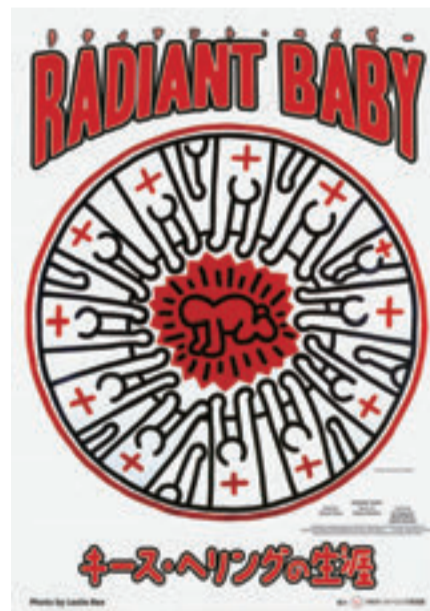
1989年、東京生まれ。幼少期からタップをはじめ、16歳で渡辺かずみ氏に会い、タップの虜になる。高校卒業とともにニューヨークに渡り修行。2008年にシカゴ、東京、2009年にロサンゼルスで行われた「カッティングコンテスト」で優勝。日本各地でのライブやワークショップはもとより、ニューヨーク、カナダ、アジア各地でも活動している。2015年には、CD「みるくゆ」(板橋文夫FIT!+頼家心平・嶺巖雅代・レオナ)をリリース。
<http://reona-tap.jimdo.com/>

ダンサーであり、ミュージシャン。ジャズやインプロ(即興演奏)のセッションにプレイヤーとして参加する強者だ。「音楽を構築するメンバーでありたい」と語るレオナさん。高校生のときのストリートスタイルのおっちゃん(師匠)との出会いが衝撃的だったという。振付のあるミュージカルのタップとは違って、ひたすら自主練して、まわりから盗む。自分で研究しているうちに、ダンスの枠を超えた音楽の追求に向かった。

ピアノやベース、パーカッションとの即興セッションは、まさに真剣勝負。アコースティックな空間で、間近に迫るお客さんには「何かを与える気はなくて、さらけ出す感じ」。無茶がたたって、20歳のときにヘルニアで苦しんだことも。それから、筋肉の使い方やバランスを意識するようになって、音も変わったという。「日々限界という感じだから、全体的に上がっていく。毎日違うところにいける」。

アートディレクターの眼

最近色々な公演のフライヤーが面白くなってきている。ここでは5月から8月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



「RADIANT BABY」キース・ヘリングの生涯
2016年6月6日(月)～22日(水) / 日比谷シアタークリエ
演出:岸谷五朗 / 脚本・歌詞:スチュアート・ロス
音楽・歌詞:デボラ・バーシャ / 歌詞:アイラ・ガスマン
デザイン:東 白英・戸水康介 (W.P.G)

50代のデザイナーにとって、アーティストである「キースヘリング」はとても興味深い存在。フライヤー全体のデザインも素敵だけど、あのキースヘリングが舞台になるんだ!という驚きと興味で選んだ1枚。中面はキャスト紹介のページだけど、その衣装も面白くて、ぜひ本物の舞台を見てみたい。

新村則人=アートディレクター。1960年生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。JAGDA・東京ADC会員。



「コペンハーゲン」
2016年6月4日(土)～7月3日(日) / シアタートラム
作:マイケル・フレイン / 翻訳:小田島恒志
演出:小川絵梨子
デザイン:平田 好 / 画:ヴィルヘルム・ハンマースホイ

デンマークの画家である「ヴィルヘルム・ハンマースホイ」は時間が止まったような室内画を多く描いている。この舞台は、ナチス占領下のコペンハーゲンで、敵対する国家に生きる二人の科学者が語り合った「謎の一日」に迫ったものだが、彼の絵と整然としたレイアウトが、物語をうまく表現している。



FESJ/2015/Mariko Tagashira

福島県相馬市の子どもオーケストラは、子どもたちが音楽に親しむことを地域で支える場。東日本大震災後、学校でのクラブ活動への支援から、学校の枠を超えて参加できる週末弦楽教室がスタートした。今では90名の子どもたちが、それぞれのペースで音楽にふれている。

実は、福島県には、もともと器楽部（弦楽器のクラブ）のある小学校が多い。小1でヴァイオリンをはじめた菅野朱音さん（中3 / 2016年2月取材時）は、楽器を続けたくて弦楽教室に参加したうちの一人だ。新しく入った子に弾き方を教えることもあるし、学区の違う友達も増えた。「いろんな楽器、いろんな人と演奏できるのはすごく楽しい。

高校生になっても続けたい」と、笑顔がこぼれる。

子どもオーケストラでは、弦楽教室の子どもたちに、吹奏楽をやっている高校生が加わる。以前はピアノでポップスを弾いていたという蔭山愛乃さん（中1）は、「弦楽教室でやるのはクラシック。かっこいい！管楽器の音もきれいで迫力がある」と、幅広い音楽、生の音にふれる時間を楽しんでいるようだ。一方、妹のひな乃さん（小1）からは、「れんしゅうきらい。むずかしい」と素直な声ももれてくる。中川颯くん（小5）は、ベートーヴェンの交響曲「運命（全楽章）」を含む約2時間のプログラムに兄弟でフル参加している。「弟と一緒にできるのも嬉しいし、みんなと合わせる

のが楽しい。難しいけど、もっとちゃんと弾けるようになりたい」と、毎日家でも30分、コツコツ練習に励んでいる。

指導にあたる須藤亜佐子先生は、「練習の積み重ね、音楽の経験を通して、あきらめない子に育ててほしい」と、あたたかく見守っている。行政の理解を得ながらこの取り組みを進めるのは、エル・システムジャパン代表の菊川穂さん。「少子化で部活動が成り立たない学校もある。地域での取り組みは大事」と、ベネズエラ発の仕組みをベースに、弦楽に加えコーラスの教室も開かれ、岩手県大槌町での活動も始まった。様々な支援のもと、子どもたちの晴れの舞台も、ドイツや東京と広がっている。

NEWS

九鬼葉子 著
『関西小劇場30年の熱闘』3,000円+税

舞台が生まれるには、表現者のみならず、上演する場とそこに関わる人も大きな要素。年月とともに遷り変わる関西小劇場とともに、演劇の役割についてもふれられています。（晩成書房 / 2016年）



内田洋一 著
『危機と劇場』2,000円+税

災害が起きたとき、何ができるか。劇場での営みは何なのか。阪神大震災、東日本大震災を経て出てきた動きや考え方も含め、様々な視点からつづられています。（晩成書房 / 2016年）



国際演劇評論家協会日本センター
新野守広・西堂行人・高橋豊・藤原央登 編
『「轟音の残響」から一震災・原発と演劇一』
2,800円+税

東日本大震災から5年、演劇関係者はどう動いていたのか。公開フォーラムやインタビュー、取材記事などから時間の経過の中での演劇の意義を再確認しています。（晩成書房 / 2016年）



芸団協『芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査』
特設サイトがオープン

実演家・スタッフの生活の実態はどうなっているのか？芸団協が行っている芸能版・国勢調査ともいえる5年に1度のアンケート調査結果をもとに、特設サイトがオープンしました。働く環境、人材育成、社会保障、芸能の価値をテーマに行ったシンポジウム等のまとめから、現状が浮かび上がります。
<http://www.geidankyo.or.jp/research/life>

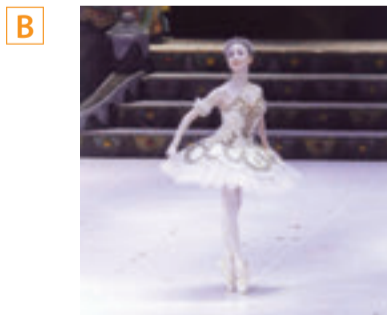


PRESENT



影山ヒロノブサイン入り
JAM Projectオリジナルアルバム 3名様

6/29リリース、メンバーが書き下ろした楽曲と若手クリエイターの感性がぶつかるアルバム。迫力のサウンドに気分爽快！ライブの予習にも。



松山バレエ団『くるみ割り人形』ペア2組

クリスマスシーズンにご家族で楽しめる大人気の演目。華やかなお菓子の国を舞台に少女クララのあたたかい愛の心が輝きます。
12/3(土) 東京文化会館 森下洋子主演

【プレゼント応募方法】
とじこみはがきが必要事項をご記入の上お送りいただくか、SANZUIウェブサイト (<http://www.cpra.jp/sanzui>) からご応募ください。[締切]8/31(水)

*当選の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



編集後記

早いもので『SANZUI』創刊から丸3年が経ちました。ジャンルを超えて実演芸術が持つ多種多様な魅力を少しでも多くの方に伝えたい。生の舞台を親に行き、その迫力を体感していただきたい。そんな想いから発行された広報誌でした。『SANZUI』を創って行く中で沢山の演劇家、実演芸術を取り巻く人々に出会い、一人一人の情熱が作品として昇華していく素晴らしさを、ミュージシャンとしても改めて感じました。これまで取材にご協力いただいた皆さまに改めて感謝いたします。10号という区切りを迎え、『SANZUI』は一旦休刊する運びとなりました。「石の上にも三年」といいますが、私たちの試みはどこまで目標に近づけたのか。さらに効果的に発信していくにはどうしたらいいのか。新たなスタートを切る上で、読者の皆さまのご意見・ご感想を是非お寄せいただければと思います。『SANZUI』で出会った沢山の「感動」「感謝」を胸に、芸団協CPRAはこれからも走り続けます。
(発行人・編集人 松武秀樹)

WEBサイト: <http://www.cpra.jp/sanzui/>
Facebook: <https://www.facebook.com/sanzui.news>
Twitter: @SANZUI_info

発行:公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権隣接センター(芸団協CPRA)
発行日:2016年5月1日
発行人・編集人:松武秀樹(芸団協常務理事・芸団協CPRA法制広報委員会副委員長)
編集顧問:大笹吉雄(演劇評論家)
編集:芸団協CPRA法制広報委員会SANZUI編集プロジェクトチーム
上野博(音制達)、丸山ひでみ(PRE)、鈴木明文(音事協)、井上滋、君塚陽介、榎野睦子、大井優子、小泉美樹(芸団協CPRA)
アートディレクター:新村則人
デザイナー:庭野広祐(新村デザイン事務所)
コピーライター:二藤正和
協力:芸能花伝舎、新国立劇場

芸団協・実演家著作権隣接センター(CPRA)とは
CPRAは実演家の権利処理業務を適正に行うための専門機関として、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)と関係団体の協力により1993年に発足しました。レコードやCDを放送で使ったり、レンタルしたりするとき等の権利処理と使用料等の徴収を行い、委任権利者に分配しています。それに留まらず、広く実演芸術の円滑な流通と権利の擁護を目的として幅広い活動を展開しています。<http://www.cpra.jp>

田中 泯

Tanaka Min

Text / Yuma Ochi Photo / Ko Hosokawa

盆踊りが原点。

無名であることに踊りは宿る。



現在、映画、テレビに俳優としても出演し、独特の存在感によって見る者を魅了し続けている舞踊家・田中泯。1970年代以降、裸体の前衛ダンサーとして芸術の中心地であるパリ、ニューヨークをはじめ、東欧諸国から東南アジアに至るまで数多くの都市・地域で踊り、常にセンセーションを巻き起こしてきた。初舞台から半世紀余り。踊り続けるうちに世界の舞台芸術界にその名を轟かせる稀代の舞踊家となった今も、山梨で農業を営みながら究極の踊りを探求し続けている。

スポーツの世界から

芸術の世界へ

—— 泯さんは元々バスケットボールの国体レベルの選手だったと伺いました。踊りを本格的に始めたのはいつ頃からでしょうか？

田中 中学から高校、大学までバスケットボールをやっていました。もちろん上を望んでいましたが、しかし、大学に入って上には上がいると気がついたんです。アスリートの世界の競い合いに嫌気が差してしまい、オリンピックの前に辞めてしまいました。そのピックの前に辞めてしまいました。それでバレエのスタジオに見学に行っただけです。理由は簡単で、幼少期に盆踊りに出会って以来、好きだった踊りを正式に習うにはどうしたらいいかと考えたからなんです。

—— 初舞台はいつだったのでしょうか？

田中 オリンピックに関連して芸術祭が開かれていて、その枠内で『マダム・パタフライ（蝶々夫人）』のバレエ版が公演されたんです。そこで、蝶々夫人の結婚シーンの参列者でちょっと出れば済むような役をもらいました。端役と言っても、ダンサーでなくては駄目なわけですね。僕はまだ習い始めていたが、一応、つま先を伸ばして、ピットとやるぐらいはできたんです。

—— この初舞台が、舞踊を仕事とするきっかけになったのでしょうか。

田中 ならなかったですね。なんか違うと思っていました。むしろ転機となったのは、1968年に観た土方巽の『肉体の叛乱』ですね。それと大学では殆ど授業に出席しませんでした。籍を置いていた東京教育大学（現筑波大学）の舞踊学研究室に時々顔を出し、歌舞伎研究者の郡司正勝さんや舞踊評論家の市川雅さんらの知己を得て話している内に、踊りの技術とは何なのか、技術があればそれは踊りになるのかなどと考えるようになりました。踊りをやり続けようと思ったのは、それを突き止めたいと思ったからなんです。

芸能と芸術の間で

—— 幼少期に踊りの魅力を知るきっかけになったという盆踊りの体験もその志向に影響しているのでしょうか。

田中 はい。子どもの頃に自分が好きになった盆踊りや神楽のような芸能としての踊りと、当時習っていた芸術としての踊りとの違いは何か、そんなことを常に考えていました。それは言わば土の上の踊りと、観客が入場料を払って観る舞台という場所での踊りです。その違いはすごく大きいと思っています。一般の人たちこそが、実は年がら年中、郷里の踊りを見ているわけです。日本は、まさに芸能の宝庫ですから。芸能の窓口は本当に広い。家の中でテレビを観て子どもが踊り出すことがあります。そういう世俗的な踊りすべてを含めて考えていないと、踊りの本質には到達できない。自分は前衛の芸術舞踊をやっているなんて言っちゃられないですよ。僕はそのことを20代の初めから予感していました。

—— 70年代以降、既存の芸術の枠を破るダンスを次々と発表されますよね。泯さんは裸体の舞踊家とも呼ばれて、パリやニューヨークでもセンセーションを引き起こしましたね。

田中 劇場では踊らず、野外でほぼ裸体で踊っていました。客席を疑い、音

踊りとは何か、突き止めたかったと思った。



踊りはみんなに共通のものをその現場で探すこと。



Bommalpalyam Village, South India ©Manoj Parameswaran

楽を疑い、舞台を疑い、既存のダンス公演の形態のすべてを疑っていました。だから野外で踊ったし、衣裳も疑っていたから、必然的に裸体に辿り着きました。普通ダンスは、基本的には身体を動かしていくわけですよね。僕の場合は、動くのではなくて動けない状態例えばブリッジのような姿勢を選んで数時間その姿勢に留まるんです。それは普通に踊るよりもかなり苦しい体勢ですが、僕の身体は感覚で充滿している、音、空気、ほこりだとか観客の視線など、そういうものが身体に押し寄せてくるのがわかるんです。

—— 泯さんが踊る時、泯さんの身体に満ちている感覚が観客にも伝播していると感じる瞬間があると思います。

田中 実は、踊りは違いを見せることではなくて、みんなに共通のものをその現場で探すことなんです。そして見つかった何かがその場に居合わせた人たちの中に届くかどうかの問題です。届けば、その人の身体は変わりますよね。「あつ」と思う瞬間がある。そこから初めて踊りという境地に僕たちは到達できるんです。こちらが準備したものを観客の前で踊るだけでは本当は片手落ちなんです。

自然の中の暮らしと踊り

—— 泯さんは現在、山梨県で農業を営んでいらっしゃいます。東京を離れて農業を始めた理由は何でしょうか？

田中 僕自身は、子どもの時からずっと自然に親しんできましたから、僕にとって自然は神様みたいなもので、ずっと身体の中では生きていたんですね。ただ、暮らしの仕方がそんなに自然に近いものではなかった。それで40歳の時に、もう一度自然の中に戻る必要を感じました。言葉が生まれる以前に人類が過ごした長い時間や踊りの起源を知りたくて農業を始めたんです。農業は生物の歴史に関わる仕事ですから。—— 農業をやることで身体感覚や考

えは変わったでしょうか？

田中 農業をやっていると気象に鋭敏になります。僕たちはどこに行っても自分が中心だけでも、気象というのは簡単に中心が変わる。あるいは中心がふつとなくなることが起こる。それと同じような風に人間は振る舞わなければならないのではないかと思っただけです。というのは、人の社会には常に上下関係があったり、優劣があったりする。でも、小さな頃は、人と同じ方が嬉しかったんじゃないかと思うんですね。それが次第に勝ち負けが大きな喜びになっていく。そうした社会の構造へのある種の批判的なモデルを探す機会でもありました。

踊ること／演じること

—— 2002年以来、映画やドラマで俳優としてのお仕事も多数こなされています。踊ることと演じることの間に何か違いはあるのでしょうか？

田中 演じることというのは、一つの役の人生に入り込んでいく。あるいはその人生が身体に入り込んでくるということだと思います。踊りというのは、自分の身体から感覚やエネルギーを全部放出して、反応を返してくる観客一人ひとりと自分が繋がるか、切れるかを覚悟しながら行う作業なんです。最初から一切、観客を一つにまとめようと思わない。踊りは、観客一人ひとりが絶対的な個の時間の中にいられることを保証する関係の中にあるんです。—— 泯さんが役者として出演される時「存在感がある」とよく言われますが、仰られたように、通常の役者の有り様と異なる方法で存在しているからかもしれないですね。

田中 見た人が「存在感」という言葉で表すものが何なのかは、むしろ、僕の方が知りたいぐらい。でも実際僕は存在することに賭けてきた。第一そうでなければ、簡単に観客から捨てられていきます。パレエだって同じように

踊っているけど、観客は「あの子がいいね」と言うじゃないですか。それも存在感だと思う。それは技術を越えたところにあると思います。

究極の踊りを求めて

—— 70歳になる現在ですすでに果敢に踊りを探求されてきたかと思いますが、これから挑戦したいと思われることはありますか？

田中 ダンスは特定のダンサーや振付家に留まるものではなく、途方もなく長い歴史の中で引き継がれ、人類の誰もが持ちうるものだと思うようになりました。ひよっとしたら空気とかそういうものと同じように目に見えない物質として存在するんじゃないかと思うんです。だから、有名性という問題に、今ダンスをやっている人は目覚める必要があると思います。有名であれば興行は成功するかもしれませんが、しかし、本来、名前が踊りを助けてくれるはずがないんです。無名な身体にこそ、踊りは宿るのではないか。例えば、ある人が個性を持って踊るとするじゃないですか。でも、それはものすごく小さな単位の踊りで、その人の所有物にしかならないんじゃないかという気がするんです。そうしたダンスは、経済の論理だとか、世の中の体制の中に取られ込まれ、有名な踊り手としてその人の名が残るかもしれないけど、人類のダンスの本流からは外れます。でも、もしそうした体制をひっくり返し、無名の人によって繋がれてきた踊りの歴史の一部になることができるとすれば、僕はそのための生贄^{いけにえ}になりたい。そして、それが人類への贈与になるとしたら、ダンサー冥利に尽きますね。

PROFILE 1945年、東京中野区生まれ。クラシック、バレエとモダンダンスを学び、66年からソロダンス活動開始。「ハイパーダンス」と称して新たな踊りのスタイルを発展させる。78年パリ秋季芸術祭「日本の間」展で海外デビュー。85年山梨県の農村に移住、農業生活を開始。97年伝統芸能・民俗芸能に焦点をあて「場踊り」を展開。2002年より、ダンサーとしての経験を活かし、国内外を問わず多数の映像作品に出演。現在も土方巽に私淑。著書『僕はずっと裸だった』、対談『意身伝心』。



ロングインタビュー
田中 泯